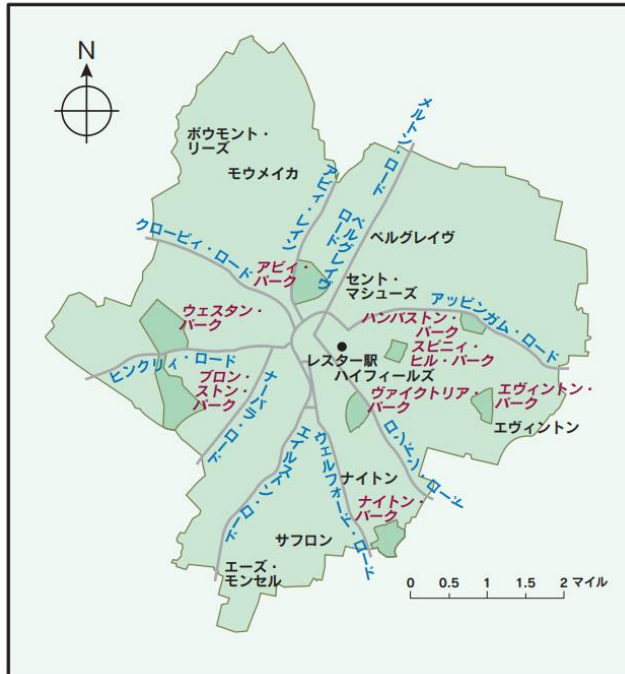


『記憶と語りシリーズ』 I (2010–2020年) の刊行を終えて



レスター

刊行の目的と経緯

イングランド中部に位置する地方都市レスターは、イギリスの代表的な多民族・多宗教都市のひとつとして知られる。私は、2001年度の在外研究時にいくつかの予期せぬハプニングがあって、この都市に取り憑かれてしまい、それ以来、年に数回足を運び、第二次世界大戦後のレスターの歴史や文化について現地調査を続けてきた。10年後の2010年10月には、同僚たちの協力を得て、明治大学特定課題研究ユニット「多宗教・多文化の歴史研究所」

(Research Centre for the History

of Religious and Cultural Diversity) を立ち上げ、そのプロジェクトの一環として、レスター在住の、もしくはレスターと深く関わってきた個人のライフストーリーを編集し、『記憶と語りシリーズ』(Memory and Narrative Series) [英語版]として刊行を開始した。その目的は、レスターのさまざまなエスニック・コミュニティや「受け入れ社会」の人びとのライフストーリーを基礎資料として残し、いまを生きる人びとだけでなく後世の人びとにも役立ててもらおうことであった。そのため、本シリーズはレスターにある大学や地元図書館にも寄贈している。2020年の新型コロナの感染拡大が始まるなかにもありながらも、全12巻からなるシリーズIの刊行を無事に終えることができ、ホッとしている。

本シリーズの特徴

それでは、本シリーズの特徴はどのようなところにあるのであろうか。いくつか主要な点を述べておきたい。その一つは、本シリーズがコミュニティ・ヒストリーではなく、さまざまなコミュニティに生きる個人のライフストーリーをベースとした内面史研究を可能とする現代の「史料集」だという点である。この史料集には、各個人のライフストーリーの理解を助けるために、他の関連資料(写真、地図、図表、新聞記事、参考文献など)も掲載している。主人公の多くは、過去がどうであれ、インタビュー時点で自分に自信を持ち、自分のことで何かを社会に向けて発信したい、あるいはその後の自分の生き方やキャリア、さらにはコミュニティの発展に役立てたいと考えている人びとである。

二つ目の特徴は、インタビュアー（インタビューする人）の位置についてである。コミュニティ・ヒストリーのプロジェクトでは、インタビュイー（インタビューされる人）とインタビュアーの双方ともが「インサイダー」であることが多い。しかし、本シリーズにおいては、インタビュイーがさまざまなコミュニティの複数の個人である「インサイダー」であるのに対し、インタビュアーである「私」は、「受け入れ社会」の人間でも「移民」でもない「アウトサイダー」なのである。つまり、一人の「アウトサイダー」である「私」が、さまざまなコミュニティの複数の「インサイダー」と粘り強く共同作業を続け、出版に漕ぎつけていくのである。

三つ目の特徴は、ライフストーリーの「残し方」と関わる。本シリーズでは、個人のライフストーリーの文章をインタビュー時の対話形式ではなく、インタビュイーの語りとして一人称で活字にしている。それゆえ、この文章は、インタビュー時の対話の「記録」とは自ずと異なる。この方法を選択した理由は、いずれも長いライフストーリーの重複を避け、読者が読みやすいよう「ストーリー」に流れを持たせるためである。とはいえ、インタビュアーの嗜好に合わせて、インタビュイーの「語り」の内容を変更するようなことは極力避け、できるだけインタビュイー自身のライフストーリーを正確に残すよう努めている。さらに、個人のライフストーリーの一部だけを残すのではなく、その「全体」を残すように努力している。そうするのは、ある個人の一つのエピソードでも、読者がそれをライフストーリー「全体」の中に位置づけて考えることができるようにするためである。

各巻のタイトルと内容

つづいて、『記憶と語りシリーズ』Iの各巻がどのような内容のライフストーリーなのかを簡単に紹介する。

[No. 1] *Life Story of Mrs Elvy Morton : First Chair of the Leicester Caribbean*

Carnival, October 2010, 96pp, illus. [エルヴィ・モートン]

1935年にカリブ海の小さな島ネイビスに生まれ、1958年、看護師になるため渡英してきたアフリカン・カリビアン女性。奴隷制の歴史や自らの人種差別の経験を思い起こしながら、奴隷制廃止150周年を祝うイベントとして、1985年にレスター・カリビアン・カーニヴァルをスタートする。

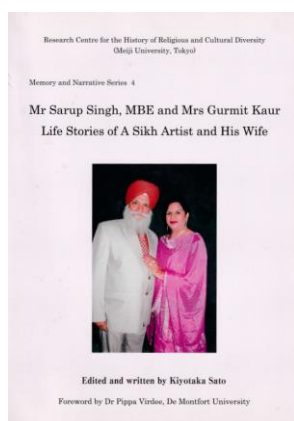
[No. 2] *Life Story of Mrs Claire Wintram: A Jewish Woman and Her Identity, November 2010, 78pp, illus.* [クレア・ウィントラム]

1949年、ロンドンのイースト・エンドに生まれ、その後の成長過程で、ホロコーストを体験した父親の影響を強く受ける。「命」の大切さを噛みしめながら、より広い視野から自らのユダヤ人アイデンティティや立ち位置を探し求めて生きるユダヤ人女性。

[No. 3] *Mrs Jasvir Kaur Chohan: Life Story of A Sikh Woman and Her Identity*, March 2011, 185pp, illus. [ジャスヴィール・コール・チョウハン]

1954年、インドのパンジャブ地方に生まれ、8歳で渡英してきたシク女性。自らの「内」にあるイギリス文化とパンジャブ地方の文化との格闘の様子を、両親や子ども世代の文化的違いにも触れながら語る。

[No. 4] *Mr Sarup Singh, MBE and Mrs Gurmit Kaur: Life Stories of A Sikh Artist and His Wife*, February, 2012, 179pp, illus. [サループ・シング（1949年生まれ）とその妻ガーミット・コール（1947年生まれ）]



サループは、1959年、画家を目指してパンジャブ地方から渡英してきたシク教徒。長年にわたって工場で働きながら、「日曜画家」として研鑽を積み、画家としての社会的名声を獲得していく。シク博物館のオープンをはじめ、シク・コミュニティの発展にも貢献。ガーミットは結婚のため18歳（1965年）でパンジャブ地方から渡英してきたシク女性。インドとイギリスとの暮らしや価値観のギャップに悩みながらも、夫を助け、子を育て、インドの伝統的な価値にしたがって精一杯生きてきたという「自らの想い」を語る。

[No. 5] *Life Story of Mr Jaffer Kapasi, OBE: Muslim Businessman in Leicester, and the Ugandan Expulsion in 1972*, October, 2012, 192pp, illus. [ジャファ・カパシ]

ジャファは、1950年に東アフリカのウガンダで生を受け、1972年にイディ・アミンによって海外への追放を余儀なくされ、渡英後レスターに居住するようになったインド系ムスリム・ビジネスマン。ビジネスを生業とするシーア派のダウディ・ボーラ・コミュニティのメンバーで、父親はインドのグジャラート地方出身。

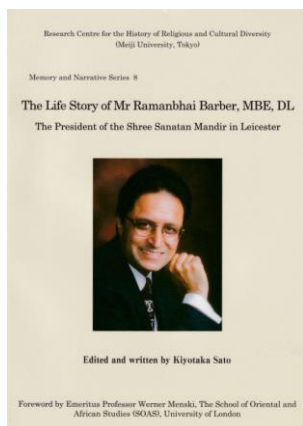
[No. 6] *The Life Story of Mr Terry Harrison, MBE: His Identity as a Person of Mixed Heritage*, June 2013, 161pp, illus. [テリー・ハリソン]

第二次世界大戦中にノルマンディー上陸作戦の軍事訓練のため、アメリカ合衆国から数多くの米兵が渡英してくる。テリーは、1944年にその米兵（ブラック兵）とホワイト女性（ウェールズ出身）とのあいだに生を受けたハイブリッド。自らのサクセス・ストーリーだけでなく、それとは矛盾する彼の「内面」の複雑な世界を「痛み」とともに語る。

[No. 7] *The Life Story of Mr Andrejs Ozolins, a Latvian, and His Wife Mrs Dulcie Ozolins*, June 2014, 236pp, illus. [アンドレイス・オゾリンズとその妻ダルシ]

アンドレイスは、1935年にバルト三国のラトヴィアに生まれ、第二次世界大戦期にはソビエトやナチの占領を経験し、その後ドイツ西部の難民キャンプなどで過ごし、1948年に渡英してきたホワイト系移民。妻のダルシは、1936年にグロスターシャー生まれのイングリッシュ。二人とも在英ラトヴィア系コミュニティの形成と発展に貢献する。

[No. 8] *The Life Story of Mr Ramanbai Barber, MBE, DL: The President of the Shree*



Sanatan Mandir in Leicester, June 2015, 234pp, illus.

〔ラマンバイ・バーバー〕

1945年に英領インドのグジャラート地方に生まれ、8歳で東アフリカのケニアに渡り、その後19歳で渡英してきたヒンドゥー教徒。レスターのベルグレイヴ地区にあるインド系ヒンドゥー・コミュニティの形成と発展に尽力。ヒンドゥー寺院〔シュリー・サナタン・マンディール〕（その前身はバプテスト教会）の元プレジデント。

[No. 9] *The Life Story of Mrs Nilima Devi, MBE: An Indian Classical Dancer in*

Leicester, July 2016, 202pp, illus. 〔ニリマ・デヴィ〕

1953年にインドのグジャラート地方に生まれ、1980年に渡英。以来レスターで30年以上にわたって舞踊家兼教師としてインド舞踊の普及に努め、インド系ディアスポラ・コミュニティの発展に貢献。本書には、ドイツ人の夫ヴィルナー・メンスキ（1949年生まれ）のライフストーリーも掲載されている。

[No. 10] *The Life Story of Dr Dorothy Francis, MBE: An African-Caribbean Business*

Woman in Leicester, June 2019, 296pp, illus. 〔ドロシー・フランシス〕

1961年にカリブ海の島ジャマイカに生まれ、5歳で渡英してきたアフリカン・カリビアン女性。現在、ビジネスウーマン。渡英後、人種差別と闘いながら、たくましく生きてきた自らの人生を語る。創刊号につづくカリビアンストーリー第2弾。

[No. 11] *The Life Stories of Nessian and Maureen Danaher: A Second-Generation Irish*

Couple Living in Leicester, March 2020, 292pp, illus. 〔ネサン・ダナハーとモーリーン・ダナハー〕

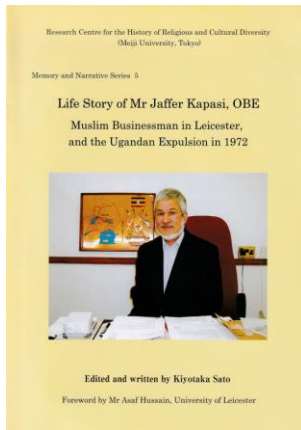
ともに1949年にイングランドで生まれ、レスターを中心に長年にわたり教員生活を送ってきたアイルランド系移民2世夫妻。ネサンはロンドン、モーリーンはイングランド北部のランカシャー生まれ。彼らは自分の人生に引きつけて、家族、ローマ・カトリック教会、イギリスによるアイルランド支配の記憶、教師としての経験、子育てなどについて語る。

[No. 12] *The Life Stories of Peter and Margaret Adamson: An Anglican English Couple*

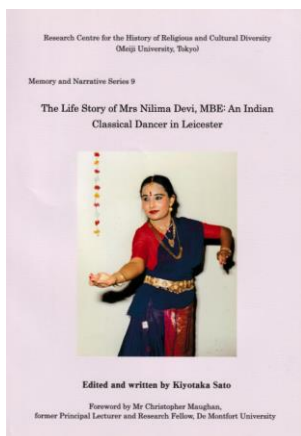
Living in Leicester, March 2020, 180pp, illus. 〔ピーター・アダムソン（1927年生まれ）とその妻マーガレット（1935年生まれ）〕

二人とも第二次世界大戦以前にレスターで生を受け、人生のほとんどをこの都市で過ごし、自らを「イングリッシュ」で「労働者階級」と見なすカップル。しかし、彼らの語りからは、自らが「イングリッシュ」らしからぬ「イングリッシュ」であることも分かってくる。マーガレットは根っからの「レスターっ子」。

出版記念パーティー



本シリーズの出版記念パーティーは、2度開催された。1回目は、5巻目のジャファの本刊行を祝う会で、2012年10月26日、レスター駅近くにある「レスター・マーキュリー」新聞社の、見晴らしのよい4階の会議室を利用させてもらった。本の刊行からパーティーまであまり日数がなかったが、インド系の元市長や他の市議会議員をはじめ、約20名が出席してくれ、充実したパーティーとなった。また、当時「レスター・マーキュリー」社の編集長を務めていたリチャード・ベッドワース（Richard Bettsworth）も出席し、お祝いのスピーチを述べてくれた。地元新聞社の会議室を利用させてもらったのは、私が10年以上も日本でこの地方紙を定期購読していたこと（*Leicester Mercury*, 26 July, 2004 参照）や新聞の切り抜きが保管されている「新聞室」を長いこと利用させてもらっていたからである。さらに言えば、このパーティーの翌日、編集長は、ジャファと私向けにこの著書の出版を歓迎するお祝いの「社説」を執筆し、この新聞に掲載してくれたのだった（*Leicester Mercury*, 27 October, 2012 参照）。



2度目は、9巻目のニリマの本刊行を祝う会であった。少し詳しく、このパーティーの様子を紹介する。というのも、このパーティーは、9巻目の出版記念パーティーというだけでなく、一連の『記憶と語りシリーズ』の刊行に対するお祝いも兼ねるというものだったからである。それゆえ、本シリーズの各主人公だけでなく各巻の「まえがき」（Foreword）の執筆者や私のプロジェクトへの協力者も出席してくれたのである。もちろん、メンスキ夫妻の関係者の出席は言うまでもない。このパーティーの開催については、レスター在住のメンスキ夫妻が全面的にバックアップしてくれた。出席者は約50名である。この本は2016年7月に刊行されたが、出版記念パーティーは、私の渡英に合わせて、8月11日に開催してくれた。このパーティーは午後5時半に始まったが、終了時間は予定よりも遅く7時半を過ぎていた。会場は、インド人街のベルグレイヴ地区近くにある「ピープル・センター」（Peepul Centre）【‘Peepul’は菩提樹の意味】である。

会場のルームの正面には、『記憶と語りシリーズ』9巻の表紙のカラー・コピーが上手に展示されており、私としても喜びを禁じ得ず、こうしたメンスキ夫妻や関係者たちの粋な計らいに心から感謝した次第である。司会は、夫のヴェルナー・メンスキが務めてくれた。



ビージーエムの流れるなか、私がニリマの弟子二人に贈った本入りの素敵な和風柄の包装紙を、彼らが上手に開き、出てきた本の表紙を見て「驚き、感動する」という演出から始まった。弟子二人とは、ギター・ラークラニ (Mrs Gita Lahklani) とアカシュ・オデドラ (Mr Akash Odedra) である。彼らに贈ったのは、この本に一文を寄稿してもらったからである。

その後、まず「前座」として、インド舞踊から出発しながらも、近年コンテンポラリー・ダンスの分野で国際的に活躍しているオデドラが踊りを披露してくれた。その踊りは、インド北部地方のカタック・ダンス (Kathak Dance) [インドの8つの主要な古典舞踊形式の一つ] で、ニリマが子どもたちに教えてきた踊りでもある。



それから、いよいよ本番がスタートである。とはいっても、スピーチは最小限にして、その後の多くの時間は、会食をしながらの自由な「懇親」や「歓談」に割かれた。最初に、司会の指示に従って、私が出席者にお礼のスピーチをし、つづいて、当時、レスター市役所の「芸術とミュージアム」部門の責任者であったセイラ・レヴィット (Dr Sarah Levitt) が多忙ななか、駆けつけ、祝辞を述べてくれた。その後、出席者は、インド料理を食しながら自由に「歓談」をして時を過ごした。もちろん、記念写真を撮る人たちもいた。このホームページでは、そのときの写真も掲載している。これらの写真には、9巻目の主人公 ニリマ、本シリーズの主人公らと彼らのパートナー、このプロジェクトの協力者たちが写っている。その場の雰囲気が少しでも伝わってくると有難い。2021年の夏に予定されていた第3回目の出版記念パーティーは、新型コロナの感染拡大のなか、残念ながら中止にせざるを得なかった。しかし、収束すれば、2022年夏の開催も夢ではないかもしれない。



「オーラル・ヒストリー協会」のブログ掲載

本シリーズの刊行後、この情報を海外の読者層に伝えようと、イギリスの「オーラル・ヒストリー協会」(Oral History Society)に原稿を送ったところ、雑誌への掲載(*Oral History*, Vol. 49, No. 2, Autumn 2021, pp. 4-5.)を許可してくれただけでなく、それがブログ担当責任者の目にもとまり、ブログも作成されることになった。ブログの最初の写真は、毎年4月にレスターで開催されるシク教の祭り「バイサキ」(Vaisakhi)のパレードが、シク寺院グル・ナーナク・グルドワーラーを出発して、ちょうど別のシク寺院グル・テグ・バハドゥール・グルドワーラーに到着したばかりの様子を伝えている。この後、数千人のシク教徒が参列して、この寺院でお祝いのセレモニーが挙行されたのである。ブログの文章は、紙幅の関係上、12巻中3巻だけの紹介である。全12巻の叢書については、本文掲載の「各巻のタイトルと内容」を参照されたい。

本シリーズに対する「書評」

本シリーズへの反応については、幸い、創刊号から国内外のさまざまな雑誌、新聞、ラジオ(BBC Radio Leicester)などで取り上げられ、読者から「書評」や私信などを通して、数多くの有益なコメントをいただくことができた。これらのコメントは、今後の研究のために役立てていければと思っている。「書評」が掲載された雑誌名をいくつか挙げれば、『オーラル・ヒストリー』(*Oral History*), Vol. 39, No. 1 (Spring 2011); 『レスターシャー・ヒストリアン』(*Leicestershire Historian*), No. 47 (2011), No. 48 (2012), No. 50 (2014), No. 51 (2015), No. 52 (2016), No. 53 (2017), No. 56 (2020) & No. 57 (2021); 『ジャーナル・オヴ・パンジャーブ・スタディーズ』(*Journal of Punjab Studies*), No. 20, 1 & 2 (Spring-Fall 2013); 『ジャーナル・オヴ・シク・アンド・パンジャーブ・スタディーズ』(*Journal of Sikh and Punjab Studies*) [2016年に雑誌名を改称], Vol. 24 (Spring-Fall 2017); 『イミグレーション・アサイラム・アンド・ナショナル・ロー』(*Immigration, Asylum and National Law*), Vol. 29 (3) (October 2015); 『ザ・イースト・エイジアン・ジャーナル・オヴ・ブリティッシュ・ヒストリー』(*The East Asian Journal of British History*), Vol. 4 (March 2014) & Vol. 8 (April 2021); *Discussion Paper* [Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, Meiji University, Tokyo], No. 6 (2015), No. 7 (2016) & No. 8 (2018)などがある。

その他、事務局が本学文学部の共同研究室内にある「駿台史学会」発行の『駿台史学』誌上にも、本シリーズに対する3本の「書評」(148号, 2013年3月 [コリン・ハイド Colin Hyde]; 163号, 2018年3月 [シンシア・ブラウン Cynthia Brown]; 173号, 2021年9月 [ヴェルナー・メンスキ Werner Menski])が掲載されている。このテーマに関する私の新聞記事やエッセイについては、「移民の街ドラマ聞き歩記」(『日本経済新聞』文化欄(2015年8月14日)や「多民族都市レスターに憑かれて」(『広島日英協会々報』(No. 113, 2017年5月31日)などを参照されたい。

最後に、このホームページでは、現在、1855年に創設された「レスターシャー考古学・歴史協会」(Leicestershire Archaeological and Historical Society)から刊行されている『レスターシャー・ヒストリアン』(*Leicestershire Historian*) 最新号 [No. 57 (2021), pp. 67-68] の「書評」2本を紹介している。その一つは、No. 11に対するシンシア・ブラウンの「書評」である。彼女は、レスター大学「イースト・ミッドランズ・オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」(EMOHA) の元プロジェクト・マネージャーである。もう一つは、最終号のNo. 12に対するマーガレット・ボニー (Margaret Bonney)の「書評」である。彼女は、「レスターシャー・レスター・ラトランドのレコード・オフィス」の元館長である。これらの「書評」をこのホームページに掲載する許可を与えてくれた「レスターシャー考古学・歴史協会」に心からお礼を申し述べたい。

連絡先：佐藤清隆 Email address: fwht7773@gmail.com

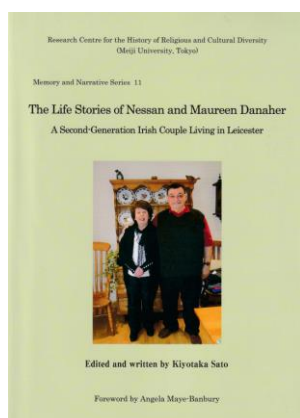
※ なお、本シリーズは、当研究所から刊行され、刀水書房(ホームページ <http://www.tousuishobou.com/narrative%20series.htm>) からも入手可能である。

『レスターシャー・ヒストリアン』[No. 57 (2021)] 掲載の「書評」

THE LIFE STORIES OF NESSAN AND MAUREEN DANAHER: A SECOND-GENERATION IRISH COUPLE LIVING IN LEICESTER

Kiyotaka Sato

Research Centre for the History of the Religious and Cultural Diversity, Meiji University, Tokyo, 2020, 292pp, illus.



This is the eleventh and penultimate volume in Professor Sato's 'Memory and Narrative Series One', based on hundreds of interviews conducted by him among Leicester's diverse ethnic and faith communities. Its subjects, Nessian and Maureen Danaher, were both born in England, but have retained close links to their families in Ireland, and have made major contributions to preserving and promoting Irish culture in Leicester and beyond. Appropriately enough, they met through an Irish dancing event, and dance and traditional music have retained a particular place in their lives.

In the early sections of each life story, we get to know their family backgrounds, including that of Nessian's mother Kate, who abandoned her hopes of becoming a teacher after her parents died, and moved to London in 1931 to join a friend and find work. Her experiences there, partly related in her own words, shed much light on the networks through which people acquired a social life as well as jobs, often meeting their future spouses through specifically Irish networks. Like those of Maureen's parents, who also moved to England for work, they emphasise the centrality of the Roman Catholic church in both respects, and the extent to which the life of many Irish migrant communities 'revolved around attending Mass, around rites of passage such as birth, marriage and funerals, and also around the church calendar... on Catholic primary and middle schools, on convent schools, on music, dance and sports clubs and on cultural facilities'.

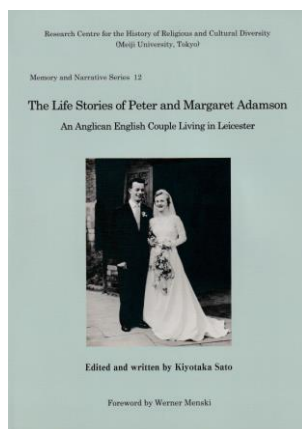
Their religion remains central to the Danahers' lives, not least in terms of their Irish identity. As Maureen puts it: 'The church is a very important part of my life. I am like an onion; no matter which layer you peel off it is still all onion. It is the core for me – the faith of my family is my whole life'. As former teachers, their reflections on multicultural education are particularly interesting, both in terms of their own careers and the Irish Studies programme that Nessian established at Soar Valley College in 1983, along with the series of international conferences that he organised up to 1995. Both also speak frankly of Anglo-Irish relations and the extent to which English rule over Ireland has impacted on their lives and those of their families. Along with documents and newspaper extracts, the book is lavishly illustrated with family photographs, whose expansive captions add still more interest to these engaging and informative life stories.

Cynthia Brown

LIFE STORIES OF PETER AND MARGARET ADAMSON: AN ANGLICAN ENGLISH COUPLE LIVING IN LEICESTER

Kiyotaka Sato

Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, Meiji University, Tokyo, 2020, 180pp, illus.



This is the last book in the illuminating ‘Memory and Narrative’ series, created and curated by Professor Sato, produced over a 10-year period, and dating back to an inspired research project arising from his first visit to Leicester in 2001. Indeed it was with some sadness that I read this book, knowing that with it we say goodbye to these uniquely historic snapshots of the life and times of people drawn from the richly diverse communities of Leicester. Professor Sato has become such a well-known figure to many of us over these years, it is

no exaggeration to say that he has turned himself into not just an observer, commentator and specialist on the recent history of the city and its residents, but also into a friend and honorary citizen of Leicester. This book more than lives up to the standard of the previous ones in the series, including an extensive section of photographs and copies of significant documents which put faces to the subjects of his interviews and make it all the more personal. There is also a pertinent foreword from Professor Werner Menski of SOAS at the University of London which helps to set the context of this volume within the whole series and gives it due recognition in the academic fields of oral history and identity studies.

The ‘Memory and Narrative’ series tells the stories of individuals living in a multi-ethnic and multi-faith city, but this final instalment is different in one important aspect – the Adamsons are not immigrants but members of the white British ‘host’ society. In writing their story, Professor Sato has answered the criticism (quoted in his Introduction) of ‘an elderly working-class woman whom I met during ... my research. She remarked: “I hear you are listening to the stories from the immigrants in this multi-ethnic city. Do you think you will understand about Leicester really just by doing that? Is it not unfair not to hear stories from us, the English, as well?” The story of the Adamsons does just this. Margaret and Peter Adamson identify themselves as English and working class, and this thread runs through the whole of their story. Peter was not in good health when the interviews began, and so the balance of the narrative is in

Margaret's hands. Peter died in February 2019 before the book was completed, but he is a constant presence throughout her recollections, as he was during so much of her life. Their story begins at a time when Leicester was mainly mono-cultural and parts of the city were still poverty-stricken slums. Although industry was booming in Leicester and jobs were easy to get, there was a stark contrast between the haves and have-nots, which shaped Margaret's politics and ethical beliefs. A feisty woman, she has no hesitation in condemning the evils of the class system and the limitations it had on young people's life chances. She was determined that her children would have every possible opportunity to grow and develop, and saw the passport to this as education – a good school and going on to university.

War dominated the early part of their lives. Peter's home was demolished completely by bombing and everything was lost. It is significant that for both him and Margaret, war brought them into contact for the first time with 'more black people', as Peter recalled – the American black GIs. It was also their first experience of racial tension and it was baffling to them. 'Ordinary Leicester people didn't understand why an American GI would get upset if they were in the pub and a black GI came in. What was the difference?' – a response which sums up another theme which ran through their lives. Both of them got to know their work colleagues and neighbours as people, of whatever background and upbringing, and to welcome the broadening of their own attitudes which followed naturally from these encounters. They have been open to change, to finding out more about others and listening to their stories, and they have passed on this attitude to their children and grandchildren – teaching them to be tolerant of others and to see what we have in common, beyond the differences. The Adamsons have a Japanese daughter-in-law, and they are delighted at the opportunity this has given them to travel to Japan and to get to know the culture and Japanese people as individuals. For Peter, this helped him to get over the experiences of the Second World War: 'what has been said and done over the years is past ... just let us move on and get on with life to the best of our ability'. The same openness and acceptance of others has also coloured Margaret's faith, of which she speaks candidly.

In this final volume of Professor Sato's series, the Adamsons reflect on their response to the waves of immigration into Leicester which they have lived through. For them, it is not threatening nor is it new – it has been a constant in their lives – and they have never found it to be a problem. Ultimately what is important to them is *respect* for others. 'I think you respect the difference but acknowledge that which is the same.'

Professor Sato has taught us through his own research into Leicester's diversity that our experiences and life choices might be very different and look very different on the outside, but by exploring, listening to and finding out more about each other's life stories we can come to understanding and acceptance, and more than just tolerating difference, we can welcome it.

Margaret Bonney

(*Leicestershire Historian*, published by Leicestershire Archaeological and Historical Society)

